

平成21年 4月30日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006～2008

課題番号：18520020

研究課題名（和文） 概念形成へのメタファの関与に関する現象学的、認知言語学的研究

研究課題名（英文） The Phenomenological and Cognitive Linguistic Study of the Contribution of Metaphors to the Concept-Formation

研究代表者

宮原 勇 (MIYAHARA ISAMU)

名古屋大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：90182039

研究成果の概要：

研究代表者宮原は分担者宮浦と共同で「認知言語学」(Cognitive Linguistics)と現象学的言語論の統合の試みを行い、言語カテゴリー生成の一般理論の構築が目指された。そこでは、〈カテゴリー生成の過程にとって具体的な身体的経験が根底において機能し、特に抽象的概念の形成やその理解にはメタファが深く関与している〉ことが明らかとなった。また、その成果を承けて具体的に基本的な「哲学概念」を事例として、概念形成を最新の認知言語学のアナロジーやメタファに関する理論によって解明し、それぞれの基本的な哲学概念の根底に秘められている「根本的経験」の解明をするとともに、最終的にはアナロジーやメタファに関わる人間の根源的認知能力を現象学的観点から解明した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,500,000	0	1,500,000
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
総計	3,600,000	630,000	4,230,000

研究分野：哲学・倫理学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：現象学、認知言語学、メタファ、概念形成

1. 研究開始当初の背景

研究代表者宮原勇は、平成14年度から平成16年度にかけて、本研究課題に密接に関連した研究課題として科学研究費補助金を「言語カテゴリーの生成に関する現象学的、認知言語学的研究」なる研究課題名の下、平成14年度には150万円、平成15年度では80万円、

平成16年度では50万円の研究補助金の交付を受けている。

プロジェクト：「言語カテゴリーの生成に関する現象学的、認知言語学的研究」では、当初、言語カテゴリーの生成と意味ネットワークの構造解明に関する原理論的究明として、Ronald W. Langacker、George Lakoff、Mark

Johnson、John R. Taylor らによる著作に現れた認知言語学的研究の哲学的内実を、フッサール現象学の立場から批判的に検討した。特に、言語的カテゴリー生成に関する認知言語学での議論と成果が詳細に検討され、その上で、言語的カテゴリーの意味ネットワークがどのように形作られ、構造化されているか、そして具体的に言語使用の場面でどのような働きをしているかが現象学の立場から考察された。

また、認知言語学では時にウィトゲンシュタインの「家族的類似性」の議論が持ち出され、概念には厳密なる意味内容は存在しないことがたびたび強調されてきた。しかし、本研究では、実はそれは概念が指し示している外延に包摂される個々の対象間の形態的類似性(形に関する類似性など)や属性に関する類似性(色の類似性など)をもって、「意味の類似性」、つまり「内包の類似性」を主張すると言った誤謬を犯している指摘された。そもそも「意味」間の類似性は、あくまでもメタフォリカルな意味でしか語れないことを明らかにした。

さらに、カテゴリー形成においては、従来の帰納法的なプロセスから「抽象」を経てボトムアップ的に形成するという方向とイメージ・スキーマを介してトップダウン的に意味概念が拡張する方向があることが指摘された。ボトムアップの方向でカテゴリー形成を説明するとなると、<類似なるものからそれらに共通なる属性を抽出する>というプロセスを考えざるを得なくなり、ある種のアポリアが生ずる。それを回避するにはやはりトップダウンの方向での概念化を考えざるを得ない。あるいは、概念化というプロセス以前に、対象を認識しそれが一旦忘却される際に何らかの「一般化」の糸口が行われているのではないかという仮説が立てられた。

言語カテゴリーの形成を分析していくと、特に抽象的概念に関しては、実はより具体的な意味をもつ概念によるメタファである場合が比較的多く見られた。それに関しては、特に Lakoff 等のメタファ論を検討し、その哲学的意味を解明した。ただ、この方向での研究、つまり言語カテゴリーの形成に関してメタファがどのようにかわるのかは新たな研究課題として残された。

2. 研究の目的

この研究は「認知言語学」(Cognitive Linguistics)と現象学的言語論の統合を目指す試みであり、言語カテゴリー生成の一般理論の構築が目指された。その研究では、<カテゴリー生成の過程にとって具体的な身体的経験が根底において機能し、特に抽象的概念の形成やその理解にはメタファが深く関与している>ことが明らかとなった。具体的には、基

本的な「哲学概念」を事例として、概念形成に際してメタファがどのように関与するかを解明した。そして、そのような具体的分析から認知言語学と現象学的言語論との関係を解明しようとした。

3. 研究の方法

(1)まず、事例として取り上げる基本的哲学术語の選定を行った。具体的には、英語とドイツ語、フランス語の主要なる哲学事典を参照しながら、網羅的にリストアップし、その後、一定の数になるように絞り込み、そのようにして絞り込んだ各概念に関して、各国語の哲学事典がどのような記述をしているか調べ、データ化した。事典は数巻に及ぶ大部の事典や古典的なものとなっている事典など、数種類を参照しながら行った。

(2)そして、次の段階として、そのようにデータ・ベース化した概念に対して、それぞれの概念がラテン語やギリシア語に語源を持ち、それと対応する概念がある場合、ギリシア語やラテン語のテキスト・データベースを検索して、可能な限り多くの用例を検討した。

(3)そして、次に古代ギリシア哲学、古代ローマの哲学、中世哲学、近世哲学の主要なテキストを参照しながら、哲学の基礎概念がどのような使われ方をしているか、一つ一つ検討するとともに、そこにはどのようなメタファが働いているか、詳細に検討した。

(4)以上の作業を、File Maker Pro 等の専用データ・ベースソフトによって全体的にデータ・ベース化した。

(5)また、平成 17 年度には単に準備的作業ばかりではなく理論的考察も行い、京都大学大学院人間環境学研究所教授山梨正明氏を招き研究会を開催し、最新の理論の摂取と新しい理論の構築に努めた。

(6)理論的な考察に際しては、各概念がどのようなソース・ドメイン(メタファとして利用される事象領域)を前提とし、身体的経験を含めそこにはどのような「根源的経験」が潜んでいるかを考究した。これと、現象学的観点からの志向性分析の手法と認知言語学や認知科学の成果を援用しての考察を同時に行った。

4. 研究成果

古代ギリシア哲学、古代ローマの哲学、中世哲学、近世哲学の主要なテキストを参照しながら、哲学の基礎概念がどのような使われ方をしているか、一つ一つ検討するとともに、そこにはどのようなメタファが働いているか、詳細に検討した。

例えば、Locke によって哲学用語となった「反省」(reflection)は、光学的現象である「反射」をメタファとして使用し、自らの意識の内部を省みる「内観」を表現したものである。しかし、reflectionは、その語源を英語からギリシア語まで遡ると、「自らの意識の内部をとらえる」<---「光が曲がる」<---「手足が曲がる」といった意味の変遷があったことが分かる。つまり、そこには身体的経験のメタファと<知=光>というメタファが潜んでいるのである。さらには、外部と内部が区別され、境界を隔てる壁が反射を可能にしていることから、「意識」、あるいは「心」が「容器」(container)というメタファによって捉えられている。あるいは、解釈によっては、反射板として「鏡」のメタファが前提されているともいえる。

以上のような究明から浮き上がってきた各哲学概念の意味内容を最新の認知言語学のアナロジーやメタファに関する理論によって解明した。それぞれの基本的な哲学概念の根底に込められている「根本的経験」の解明するとともに、最終的にはアナロジーやメタファに関わる人間の根源的認知能力を現象学的観点から解明した。

そもそも、基本的な哲学概念は、高度に抽象的な性格をもつが、しかしそれはわれわれの具体的な経験に「根」を持つものである。場合によっては、きわめて具体的な身体経験や知覚運動パターンから生ずる「イメージ・スキーマ」(認知言語学上の概念)がそこに込められている。本人がそれを意識するか否かにかかわらず、哲学者は抽象的概念の使用に当たっては何らかの具体的なモデルを思い浮かべつつ思考し、論を展開している。

例えば時間的關係を表現するのに空間的表象を使うといったように、別の領域の事象を使い思考し、表現する。その場合、空間的事象の「領域」が「ソース・ドメイン」(source domain)となり、時間關係の事象領域が「ターゲット・ドメイン」(target domain)となっている。つまり、メタファとは「ソース・ドメイン」の構造を使って、ターゲットなる事象を組織化する「投射」(マッピング)としてとらえられる。哲学概念の中には、このようなマッピングによって形成されてきたものが多く見られる。とくに、高度に抽象的な哲学的思考にメタファが関与していると言った場合、単に表現上の手段ではない。思考そのものがメタフォリカルにならざるを得ないのである。そのような思考に際して使用されるメタファとは、いわば「根源的メタファ」といってもよい。

さて、今回の研究で取り上げた基本的な哲学概念は、前述した「反省」(reflection)の他に、次のような概念がある。すなわち、「実体」(substance)にかかわる「制作」のメタファ(質料-形相関係の問題)、また「知ること」や「認識」にかかわる「制作」のメタファ(<認識=構成>図式の生成の問題)あるいは身体的メタファ(「つかむ」や「見る」という表現に見られるようなメタファ)、「時間」關係にかかわる「線」のメタファ、「主観」(subject)にかかわる(上・下といった)「空間的位置」メタファ、そして究極的には「存在」にかかわる「時間」メタファ(「現在」presentから「存在」へのマッピング)などが解明された。

平成 17 年度以降では単に準備的作業ばかりではなく理論的考察も行い、国内の研究者を招き研究会を開催し、最新の理論の摂取をおこない、新しい理論を構築した。

また、現象学的言語論と認知言語学との統合に関しては、単に哲学概念にまつわる概念形成に関するばかりではなく、そもそも認知言語学の主要な方法であるイメージ・スキーマ理論自体の意義を現象学的志向性理論の側から考察することにより、あきらかにするという作業をすることができた。

また、日本の認知言語学研究の第一人者で3 京都大学山梨正明教授の主催する研究会に参加し、研究成果を発表する機会を得て、現時点での認知言語学自体の最新の問題がどこにあるのかが明らかとなった。そもそも研究代表者宮原がもつぱら取り組んできている認知言語学の理論は、Ronald Langacker (UC San Diego)の理論であるが、2008 年に刊行された彼の *Cognitive Grammar* (Oxford UP)では、これまでの彼の理論の全面的再検討がなされているという事情や山梨教授との討論(科研費での講演会や京都大学での毎月の研究会における討論)から、「イメージ・スキーマ」というシンボリックな表示法を使い、認識主体であり表現主体の「概念化」(conceptualization)を文構造に即して解明するという認知言語学の方法論的問題をいわば「哲学的」に検討することや「概念化」という基本的概念自体を再検討する必要があることが明らかとなった。

さらには、平成 20 年度には Postphenomenology と称する意欲的なプロジェクトを展開するアメリカの現象学者 Don Ihde 氏の講演会を開催し、現象学の理論の新たな可能性を検討することが出来た。

また、本研究の最終段階として下記の問題群を扱った研究発表を行った。まず、「認識にわたる概念的枠組(conceptual framework)は、「一般的知識」(general knowledge)として、人間の意識の中にどのように蓄積されているのか」、「認知言語学でのカテゴリー化(categorization)は、イギリス経験論で議論された抽象化(abstraction)や現象学で開明されてきた概念形成(Begriffsbildung)の理論と、どのような点が違うのか」、「プロトタイプ理論において、プロトタイプ(prototype)とは、典型事例(typical example)なのか、あるいは一般概念なのか、つまり、プロトタイプは、tokenなのか、typeなのか」、「S is Pの形での概念的包摂関係の表現としてのcopula文の構造は、どのように生成したのか。この文の生成には、どのような概念的認知が関わっているのだろうか。そのイメージ・スキーマはどのように描かれるべきなのか」といった問題群に関して、『抽象概念の形成とcopula文の構造について-認知言語学と哲学的言語論の視点から-』と題して研究発表を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

1 「「間投詞」を認知言語学的に捉えなおす」
宮浦国江. 『日本認知言語学会論文集』第8巻、pp. 245-255. 2008 査読有.

2 「「間投詞」を認知語用論的に捉えなおす」
宮浦国江. 『日本認知言語学会第8回大会Conference Handbook2007』. 査読有. pp. 107-110. 2007.

[学会発表] (計3件)

1 京都言語学コロキウム 研究発表
2008年12月13日 「抽象概念の形成とcopula文の構造について-認知言語学と哲学的言語論の視点から-」宮原勇 京都市 京都大学大学院人間環境学研究所山梨研究室

2 京都言語学コロキウム年次大会 招待講演
2008年8月23日

「認知言語学と現象学的言語論の可能性 -イメージ・スキーマ理論と志向性分析の統合の試み」宮原勇 京都市 芝蘭会館

3 京都言語学コロキウム年次大会 招待講演
2008年8月23日

「概念化と言語における「気もち」の役割 -[X is X is X]を例として」宮浦国江 京都市 芝蘭会館

4 <招待講演> 財団法人語学教育研究所

春季講習会「認知言語学から考える単語の意味、文の意味」. 宮浦国江 2007年3月25日
東京・中野サンプラザ

[図書] (計1件)

1 翻訳: 宮原勇訳 ジョン・R・サール『ディスカバー! マインド』筑摩書房 415頁
2008年3月刊

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮原 勇 (MIYAHARA ISAMU)
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 90182039

(2) 研究分担者

宮浦国江 (MIYAURA KUNIE)
愛知県立大学・外国語学部・教授
研究者番号: 50275111